「オリンポスの果実」書誌調査

——第10回ロサンゼルス・オリンピック関係記事——

深　井　人　詩

（まえがき）

ひとつのテーマに関してさらに認識を深めるためには，そのことに関連する文献を，出来るだけ広く網羅的に読むことが必要である。次ぎにそれがどんな人々によって書かれてきたか，現時点でそれに関してどんな専門誌があるか，といった知識を豊富にする。多くの文献の中から，自己テーマにより近いものを選択するためには，専門家が作成した文献目録，すなわち書誌を複数比較検討すれば，有用文献の発見は容易になる。文献選択には問題意識を一層明確にする必要はいうまでもない。

本学政経学部卒業生田中英光の「オリンポスの果実」（以後「作品」と表記）の描写に関連する，1932年の第10回ロサンゼルス・オリンピック大会に関する記事の文献探索でも，多くの有効な書誌の案内で，興味深い文献に出会うことができた。

ここではまずオリンピックに関する書誌を調査収集し，そのなかから第10回大会に関する文献を選択し，重複するものを除いて，主要な関係個所を調査摘録して，短文に要約した。原文のままを引用すると，とかく長文になって，スペースがとられすぎるので，短い要約文にして，原文献へのガイドとした。Ⅰ～Ⅳ．の各項とも文献は多いが，今回は各１頁に限定した。大会報告記事と作品記事とを関連させたが，本学在学期を素材にしたこの「戦前唯一の青春小説」の多面的な理解のために，書誌調査による文献探索を試みたもので，作品研究を行うものではない。

戦前の日本では，この1932年前後が，最もスポーツ熱の昂揚した時代で，前回のアムステルダムの46人派遣にたいし，ロス大会は選手と役員190人の派遣で，開催国アメリカに次ぐ数であった。この中に本学の関係者と在学生が35人いて，６月26日に大隈講堂で田中穂積総長出席のもと壮行会を開催。政経学部１年生の田中英光は20歳，ボート選手のなかで最も若かった。35年卒業，就職後二度従軍し，北支前戦で執筆したが「オリンピックに選手として出場した男が，その回想を一篇の小説に綴るなどということは，当時としては破天荒のことだった」（平野謙）。この作品は戦後数種の文学全集に収録され，1951年には「新潮文庫」（Ⅲ～Ⅵ．の本文テキストに使用して，記事要約頁を指示。ただし初出「文学界」1940年９月を示す「4009（田中英光）」の位置に掲出）に入って，1986年までの35年間に，45万部を発売したとのことであるが，今日ではもはや忘れ去られようとしている。作品は，横浜出港後のボートと女子陸上選手との交歓。移民邦人の歓迎。大会競技での健闘と敗退。むなしい帰路の別離を描いている。

Ⅰ．オリンピック書誌の書誌

オリンピック関係書誌およびその他スポーツ・体育関係書誌を調査して，その中から第10回ロサンゼルス大会に関係する［文献数］を計量した。1書誌から計量した文献は，他の書誌にある文献と同じものである場合もあるが，同時に他の書誌に見られない文献を含んでいることがしばしばである。第10回大会の文献であることは，記事内容の実見によるものと記事名，執筆者，書名，誌名からの判断による場合とがある。配列は編刊者のあとの発表年月順，同月のものは書誌名の50音順。西暦年月の19を省略し，4桁数字に記号化している。

このリストの作成は Ⅱ．の第10回大会に関する文献を探索するためであったが，日本語文献による近代オリンピック文献目録をガイドしている。オリンピックへの日本の参加は第5回大会からであるが，記者，選手，役員，観戦者ほか各種の立場での記録が，多数の報告書，体育書，スポーツ雑誌，新聞に，書き残されていた。

書誌名（著編者）「書名･誌名　巻号」（著編者）発行所　年月　掲載頁［文献点数］

「秩父宮記念スポーツ図書館蔵書目録」　国立競技場　6303　p.33-35　［4点］
オリンピックいろいろの本(二階堂直富)「学校図書館速報版359」6407 p.1-3［5点］
「オリンピックに関する図書目録」東京都江東区立城東図書館 6407　p.4-6［12点］
オリンピックの本「出版ニュース 632」出版ニュース社 6408　p.5-11　［9点］
大学紀要掲載体育学関係論文題目リスト「体育学研究13(3)」6901　p.78-85［7点］
「野球体育博物館蔵書目録」　野球体育博物館図書室　6903　p.27-34　［12点］
体育文献目録 1956—1969年度「体育学研究 18(1)」　7308　p.45-52　［6点］
「全国大学紀要類体育学論文索引目録」　日本体育大学　7400　p.90　［1点］
「体育学研究文献分類目録　2」　（谷村辰巳）不昧堂　7509　p.305-306　［3点］
体育・運動関係書誌(西尾守夫)「大学図書館司書研修会報告書7」78　p.176［4点］
種目別スポーツ小説カタログ（新川正博）「本の雑誌 14」7807　p.76-79　［3点］
「雑誌記事索引　累積索引版 1948—1984 スポーツ」日外 8010　6冊　［12点］
「体育・スポーツ書解題」（木村秀明）　不昧堂　8101　p.43-452　［17点］
「オリンピック事典」　プレスギムナスチカ　8110　p.711-804［81点］
「体育・スポーツに関する27年間の雑誌文献目録 1948—1974」日外　8303　［12点］
「日本件名図書目録 1977—1989 スポーツ　一般件名」日外　8410　6冊　［15点］
「大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録　件名編4」　8506　p.1341　［9点］
「朝日新聞記事総覧　昭和編3」　日本図書センター　8510　p.2　［81点］
「オリンピックの本」（伊藤 公）　サイマル出版会　8605　p.271-273［8点］
「体育･スポーツに関する10年間の雑誌文献目録1975—84」日外 8706 p.20-3［9点］
「週刊誌記事索引 81/87 人物編　ち～わ」日外　8802　p.1269,1703［4点］
「民和スポーツ文庫蔵書目録」（中村民雄）　民和文庫　8809　p.49-50　［3点］
「スポーツ・保健体育総目録　1989」　東販　8808　p.67-68　［4点］

Ⅱ．第10回ロサンゼルス大会書誌

文献の探索には Ⅰ．の書誌群と，6512　田中英光主要参考文献目録（島田昭男）「田中英光全集 11」（芳賀書店）を使用している。配列は西暦年月順。その年月の19を省略して4桁に記号化し，この頁以後の Ⅲ～Ⅳ．にある記事が，どの文献からのものであるか相互に連絡できるように，各記述の初めに置いた。

年月	記事名[短縮形あり](筆者)「書名・誌名　巻号」（著者）　発行所　掲載頁
3203	オリンピックで日本は捷つか（広瀬謙三）「中央公論　47(3)」　p.202-8
3206	大洋丸だより　ほか　「東京朝日新聞　16581-97」320626-30　p.3/p.3
3207	わが女子軍出征「読売新聞　19888」320701夕刊　p.3
3207	オリンピック大観（小高吉三郎）「文芸春秋　10(9)」　p.75-93
3207	オリンピック選手送別会訓辞（田中穂積）「早稲田学報　449」　p.10
3209	オリンピック雑感（平沼亮三）「教育時論　1700」　p.2-5
3209	「第10回オリムピック画報」　興文社　横B4　222,71p.
3209	我がオリンピック水陸の成果（野口源二郎）「体育と競技 11(9)」　p.79-103
3210	オリンピック座談会（椋原政治　ほか）「早稲田学報　452」　p.48-49
3210	「第10回オリンピック大会写真帖」　帝国公民教育協会　横B4　252,41p.
3210	戦い終わりて　（織田幹雄）「中央公論　47(10)」　p.141-147
3302	「オリンピックファンに捧ぐ」（山添善治）立命館出版部　B6　281p.
3306	羅府に於ける日記　（佐野　敏）「稲門艇友会報　復活7」　p.26-32
3307	「第10回オリンピック大会想見」　常磐生命保険　B6　124,155,36p.
3310	「第10回オリムピック大会報告」　大日本体育協会　B5　342,35p.
3403	「第11期卒業生記念写真帖」日本女子体育専門学校　横B5　1冊
3405	「第10回オリンピック大会報告」（日本陸上競技連盟）三省堂　B6　356p.
3602	でかたな青大将の辯（田中英光）「稲門艇友会報　復活9」　p.32-34
5903	近代名作モデル事典（奥野健男）「国文学解釈と鑑賞　24(4)」　p.119-121
6205	思い出（東　俊郎）「オリンピック」（東　龍太郎）わせだ書房　p.147-148
6310	1932年ロサンゼルス（岸　清一）「日本体育協会五十年史」　p.283-289
6507	デカタナと私（原　三郎）「田中英光全集3　月報5」芳賀書店　p.7-8
6508	快男子の風貌（竹内良夫）「田中英光全集6　月報6」芳賀書店　p.4-6
6509	ボートと英光（藤田　明）「田中英光全集1　月報7」芳賀書店　p.6-8
8403	「第10回ロサンゼルス・オリンピック大会写真集」　旺文社　B5　125p.
8407	ロサンゼルス・オリンピック1932「宮武東洋の写真」文芸春秋　p.154-171
8805	「人生のプラットホーム」（二葉あき子）東京新聞出版局　p.31-32
8808	「小説」の真実(宮沢正幸)「文芸春秋にみるスポーツ昭和史1」　p.139-158
8903	英光の表現したアメリカ(鵜木奎治郎)「千葉大教養部報告A-21」p.181-228

Ⅲ．田中英光記事

「オリンポスの果実」執筆までの著者の経歴を辿ってみよう。1913年１月東京赤坂に出生。名は父英重の英と，父母と同郷の田中光顕伯爵の光による。光顕は維新史家英重の後援者で，英光の誕生を「岩崎に生ひ出し松のみどり子に千代の栄えの見ゆる今日かな」と祝っている。1924年自作の詩「波」が北原白秋選「児童自由詩集」に収録された。1930年早大第二高等学院入学，漕艇部に入り，５月荒川千住大橋の学院艇庫に合宿。31年大学漕艇部に抜擢，８月から翌年６月まで向島地蔵坂早大艇庫に合宿。荒川，江戸川，利根川，木更津，流山，潮来に遠漕。激しい練習に耐える。９月のインターカレッジ・レースで商大を破り，全日本選手権を獲得。32年早大政経学部に進学。５月チャレンジ・レースで再度商大を破り，オリンピック出場資格を獲得。６月30日ロサンゼルスに向け，横浜を出航。早大エイトは慶応フォアとともに女子陸上，水泳，拳闘選手らと同船であった。槍投げの真保，走高跳の相良，広橋選手らを知る。７月30日開会式，８月10日エイト2000m予選でイタリア，イギリスに敗れ３位，11日敗者復活戦でもカナダ，ドイツに敗れ，決勝進出資格を失う。作品は太宰治の推薦で1940年９月「文学界」に発表され，第７回池谷賞を受賞した。

3602 （田中英光） 逢わなくても皆様の映像は，純粋に心に残っています。デカタナが「おかしなことを書きやがて」と言う池田，松浦，西殿，藤原さんの声が聞こえます。一人だけ漕ぐのが下手だった僕が，気慨もへちまもなくして，青くなっていると，敏さんや，永井さんがいろいろ言ってくれたのを思い出します（p.33）

4009 （田中英光） ぼくの姓は坂本ですが，７番の坂本さんと間違え易いので，体の大きいぼくは，大坂（ダイハン）と呼ばれていました（p.6） 20歳のぼくを坊主と呼ぶのは，おかしいのですが，小さい時に父をなくした末っ子のぼくは，家族中で可愛がられて，体こそ６尺19貫もありましたが，まだほんとに子供でした（p.14）

6504 （藤田　明） オリンピック選手結団式で英光を私に紹介したのは，同郷の池田啓造君だった。早稲田はヘビークルーで，猛者揃い。五番松浦選手の様に不敵な面魂を揃えていた中に，英光君だけは初々しい幼な顔で，とくに印象に残った（p.7）

6507 （原　三郎） 田中英光のボート仲間の呼び名はデカタナという。それは遠征メンバーに，もう一人田中という男がいたので，６尺有余の大男の彼がデカイタナカで，デカタナとなった。1931年の春から翌年オリンピックに出かけるまで，デカタナとは合宿では隣り合せに床を並べていたので，私が文学部だったせいもあって，政経学部の学生でありながら文学論を話しかけてきた。武骨者揃いのなかでは，神経がこまやかで，案外に思うことがしばしばだった（p.7）

6508 （竹内良夫） 顔は映画俳優の石原裕次郎に似ている。美男，色男，二枚目ということでなく，快男子のタイプ。アクションドラマだったら，田中さんは最も似合う主演者だろう。哄笑しても，爆笑しても，じつに可愛らしく，愛敬があった（p.4）

Ⅳ．早大漕艇記事

早稲田のエイトは舳手原三郎（小田原中）身長1.76m体重69kg，２番榎本吉夫(小樽中）1.71m 68kg,3番酒井重夫(鳳鳴中)1.76m 72kg,4番田中英光(湘南中)1.80m 70kg，5番 松浦説雄(広陵中)1.77m 72kg，6番 西殿太郎(神戸一中)1.81m 73kg，7番田中節治(長生中)1.74m 64kg，整調 主将 池田啓造(中海中)1.70m 65kg,舵手佐野敏(沼津中)1.64m 49.5kgであった。漕艇の第1次予選は1932年8月10日，1着イタリア，2着イギリス，3着日本6分43秒4(2艇身半)，4着ブラジル。翌11日の敗者復活戦は，1着カナダ，2着ドイツ，3着日本7分22秒6(3艇身半)で予選失格となった。

3207 （田中穂積） 勝って驕らず敗れて意気沮喪せず，あくまで最善の努力を致すということが，光栄ある我が早稲田健児の伝統であります（p.10）
3210 （椋原政治） 第1予選では英国に1艇身半にまで漕ぎつけた。私共の予期した4艇身半を1艇身半にまで縮めた。よくやってくれました。実際バカでなければボートは漕げません。辛いことばかり，楽しいということは殆どありません(p.48-49)
3306 （佐野 敏） 10本ばかり漕いだら，もうイタリヤは斜め左に頭を出して来た。やられてなるものか，あと一本あと一本とオールは水に充分ひっかかっているが，追い着けそうで追い着かない。右のイギリスには抜かれてはいるがスパート，今抜ける，今に追い着くと思いながらピッチを上げ，ラストのダッシュで迫ったが，やはりおそかった。左のブラジルに勝てたと思ったら気が抜けてしまった（p.27）
3209 早大は足掛け３年間殆ど同一メンバーで練習した。１昨年東大に敗れ，昨年新人一人を補充して，平均70キロの優秀な体格となり，昨秋のインカレに堂々優勝，整調の池田，７番の田中は今春卒業したがクルーに残っていた。だから丸２年，合宿生活だけでも１年有余同一メンバーで練習していた。これは強味であったが，気分に新鮮味を欠いた。老熟したブレードワークも，潑溂さがなければ，快心のスピードを持つことはできない。早大にも多少この傾向はあった（p.66-67）
4009 （田中英光） 羅府新報は「我が稲門健児は不幸にも，北側の第一レインに当り，逆風と逆浪の最も激しい難路を辿り，天候さえも冷え勝ちで，天の利，地の利，人の利すべて我に幸いせず。頼むは日本男児の気概のみ。決勝線に入ると同時に精力全く尽き，クルー全員ぐったりとオールの上に突っぷし，森整調以下殆ど失神の状態となり，矢野舵手は海水をすくって戦友の背中に浴せ，比較的元気な松山五番もこれを手伝って，坂本四番の介抱に努めるなど，惨憺たる光景であった」（p.82）
6205 （東 俊郎） レースで，早大エイトの漕法に大きな欠陥があることが発見され，以後漕艇界では漕法論議が盛んになった。その結果はベルリンオリンピックで，東大によるピッチ漕法への転換となった。それは漕艇法の革命だった(p.147-148)
6310 （岸 清一） 今度のような実に立派な体格の選手の力戦苦闘にかかわらず敗北した以上，将来ボートとオールの漕法の変化につき大いに研究をする必要があり，今までの英国風のボートは根本的改造を要する（p.288）

V．相良八重記事

相良選手が，私達の「スパイクの跡」といっているのは，前年に死んだ同じ女子体育専門学校の先輩人見絹枝（1907—1931年）の著書名を踏まえている。

3405（相良八重）私達は，御熱心な高田先生，織田先生に，朝に夕にご指導を頂き，皆様のご声援にたいしても，勝たねばならぬと念じておりました。けれども私達の残したスパイクの跡は，余りに小さ過ぎました。せめて今後は，微力ではありますが，女子陸上界のために尽くしたいと存じます（p.241-242）

3405（高田　通）走高跳選手相良は，振り上げ脚の足先に力が入り過ぎて，踏切脚が十分踏み伸びない中に引き上げるから，振り上げ脚が十分に上がらない。従って身体が高く浮かないという点が改良すべき点であった（p.75）相良は1m46を跳んで1m50で失敗し，広橋は1m50（実測の結果1m49）に成功したが1m52で失敗した。しかしこれは日本出発前の1m48の日本記録を破っており，相良としても日本最終予選の1m47と殆どタイであるから，まず彼女たちの実力は十分発揮されている。ただ相良は広橋より経験が少ないため固くなり，いつもの悪い癖がでたようだ（p.94）

3405（広橋百合子）8月1日女子走高跳は10名で，相良さんと私が一番小さく，他国選手に比べて子供と大人の様な感じがしました。バァは1m50にあげられました。日本で誰もパスした事のない高さです。しかし他国選手は見るも軽そうに跳びました。私共は二回ともファールでした。後一回です。ラストの奮闘です。しかし相良さんは惜しくも失格。相良さんを失った私は，一層頑張らねばならなかったのです（p.244）

4009（田中英光）「よさこい節ってあるんでしょう」「ええ，こんなんですわ」とあなたは，悪戯ッ児のように，くるくる動く黒眼勝の，睫の長い瞳を，輝かせて頬笑むと袂を翻えし，かるく手拍子を打って，歌いながら，踊りだした（p.25）「こんなにしていて，見つけられたら大変やわ，これ上げましょ」と，ぼくの掌に，よく熟れた杏の実をひとつ載せると，船室のほうへ駆けていった（p.41）

5903（奥野健男）熊本秋子は旧姓相良の前田八重である。オリンピック後，三次市の前田家に嫁いだ。三次は古風な土地柄で，現在八重は家庭の主婦として，目だたない暮らしをしている。筆者が会った彼女は，地方名流婦人の風格があった（p.121）

8805（二葉あき子）「てんぷらのころもって，うどん粉を卵でまぜるんよね」「違うわ。メリケン粉よ」と相良先生。とりかえに行った私に，店の娘さんが「とり替えても，また同じもんよ，先生」なーんだ，うどん粉とメリケン粉は同じものだったのか。「体操の先生と音楽の先生だもんね。仕方ないよ」と相良さんは大笑いした（p.31-32）

8808（宮沢正幸）相良八重は国鉄トンネル技師長の次女で，1913年11月千葉県八重原村に生れたので八重と名付けられた。土佐高女時代陸上にデビュー，日本女子体育専門学校在学中にオリンピックに出場。体専卒業後広島県三次高女で教鞭をとる。同市で前田嘉市と結婚。1967年4月28日心臓発作で死去。53歳であった（p.147）

V．女子陸上記事

走幅跳びの相良は，練習中に1m53も出しながら，当日は調子がでず1m46で9位。広橋が健闘して1m50を跳んだが8位。1位シーレ（米）は1m65，実力の差であった。期待された中西選手も，第2と5のハードルを倒して棄権。槍投げ真保4位，円盤の石津は8位。村岡，中西，土倉，渡辺の400mリレーは5位であった。

320626 （朝日新聞） 真保，石津嬢などはニホンキモノを着ても堂々たるものだ。相良嬢が無邪気に「笑っちゃいやよ」といっているが，長身に似合っている（p.11）
320701 （読売新聞） 期せずして早，慶，明各校の校歌エールが鳴り響き，その間に陸上の真保，相良，水上松沢嬢と一挙に3人も送る女子体専の全校生徒2百余名が，二階堂トクヨ女史の指揮で，拍手と万歳の応援をしているのが異彩を放つ（p.3）
320710 （朝日新聞） 昨夜からの風は秒速18mとなり，波は甲板に飛び，船は揺れ，皆船酔いで苦しむ。女子選手皆たおれ，相良，中西嬢だけ食堂の勇者となる（p.3）
3207 （小高吉三郎） 女子の競技は，いわば番外競技というやつで，オリンピックの成績にはなんの関係もないのだ。一抱えあれど柳は柳かな，だね（p.76）
3209 （野口源二郎） 主将真保の第4位は初陣としては立派であった。あの身体ではまだまだ伸びそうに思われる。相良，広橋もよく跳んだが相手が強すぎた（p.94）
3210 （織田幹雄） 人見嬢のような肚の坐った立派な体格の女性の派遣（p.146）
3302 （山添善治） 8月7日午後2時半相良は1m50で失敗したが，広橋は鮮やかに跳び観衆の拍手を受けた。他の選手が5尺5，6寸以上の身長を持ち，均整のとれた体格の持主ばかりの中に，小柄な身体で，見事飛び越えたから感心したのである（p.99）
3405 （石津光恵） 外国選手は腰，脚の力が非常に強いのです。そのフォームも比べられないほど，力強いところがあります。それが最も表われるのは，投擲の最後に腰を思い切り落して，バネを利用して一気に脚を踏みかえる時でした（p.250-251）
3405 （中西みち子） 80mハードルは，一生忘れる事の出来ない悲しい出来事でした。高田先生に，なんとお詫びを言ってよいかわかりませんでした（p.239-240）
3405 （広橋百合子） 大洋丸で船に不馴れな私はこの永い航海をなにより心配しました。よいコンディションを，船中で，彼地で，保持せねばならぬのが第一条件でしたから（p.243）鼓動の激しく鳴るのを押さえて，じっとバーを見つめて私は，力の限り踏切りました。バーに触れたかと思いましたが，幸いセーフでした（p.245）
3405 （真保正子） 大洋丸での槍投げ練習は，不便な船中ながら，丁度捕鯨船の道具のように，30mばかりの細縄をつけて，海中に投げ，フォームの研究をした（p.247）
4009 （田中英光） 50mも海に向かって風をきり，突き刺さって行く丹智さんの槍の穂先が，波に堕ちるとき，キラキラッと陽に眩めくのが，素晴らしかった（p.29）
アマゾンヌのような，トレーニング・パンツ姿が，風をきって疾走してくる。
ひどく真剣な，汗みどろの顔になっているのが，一種異様な美しさだった（p.28）

（あとがき）

汎用的な「書誌の書誌」（３次文献）からテーマに沿った複数の「書誌」（２次文献）を選択し，その「書誌」群からテーマに近接する書誌（１次文献）を選択すると，この段階では，かなり同一文献の重複するのが見られる。記述は異なるが，記事名，誌名，発行所名，発行時期などから，重複と見られる文献を除き，あらかじめ設定していたテーマ自体を再検討し，他者執筆の文献に，自己主題との一致点を探す作業となる。そしてわずか１頁だけが，探索者に必要なものとなり，そしてついには数行だけが調査探索の目的であったことがわかる。しかしながら，この数行だけを抄録すると意味不明になる場合が多い。そこでそこだけを読んでも判るように，周辺の事情をとり込んで，しかも同じ文脈に仕立てなおした。

これが今回の書誌調査と記事抄録の要点である。文献提供者として，つまり内容理解の程度をここまで伸長させてみた。文献内容と問題意識の交叉点を抄録や引用や，ここに展開したような要約のかたちでしめすことが，資料提供作業としての責任を進めたものとして，図書館利用者に役立つ方法であろう。従来の，書誌記述だけの提供では，文献所在を指示するだけであり文献の内包するところが理解されないので，利用価値が少なかったとおもわれる。

第10回オリンピック大会，戦前では本学が最も多数参加者を派遣したこの大会に日本人が記録に残した記事のなかから，田中英光が作品に描いた範囲と，その周辺をここに記事要約で示し，さらに限られた紙面を考慮して，Ⅲ．主人公である英光自身と，Ⅳ．英光が所属した漕艇クルー，Ⅴ．作品中の熊本秋子すなわち相良八重，Ⅵ．八重が所属した９名の女子陸上選手グループ，この４項目に関する記事だけを掲げた。要約は原文の内容をそこなわない限り，できるだけ短くした。表現は現代仮名遣い，漢字は常用漢字，漢数字は算用数字に直している。

なお今回判明した田中英光と図書館との関係を付記すると，英光の父岩崎英重の後援者で，英光誕生を祝って，自作の歌を贈った田中光顕は，本館が所蔵する２点の国宝の寄贈者である。また1989年11月日本橋丸善での当館「ワセダと現代の作家たち」展に，展示の一人ＳＦ作家田中光二氏（1967年文学部英文卒業）は，田中英光の次男である。また少年英光の才能を最初に認め，詩「波」を「児童自由詩集」に収録した北原白秋は，早大学院に英光よりも26年前の1904年に入学した先輩文学者である。白秋は翌1905年１月「早稲田学報」に，懸賞第１位の詩「全都覚醒賦」を残しており，英光は1939年５月の同誌に「戦地だより」として「戦友の死臭の鼻に残る夜は想ふことなぞおほくありける」（当館金子宏二課長教示）という一首を残している。なお今回筆者は「オリンポスの果実」に関する批評記事30点余を調査して，その目録と要約を「書誌調査1991」（私立大学図書館協会書誌調査研究分科会）に掲載した。

（ふかい　ひとし　和書データベース化事業室）